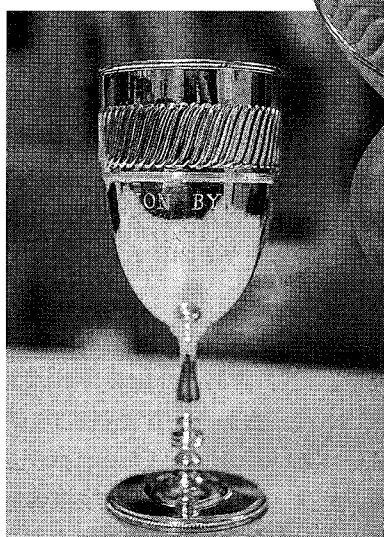
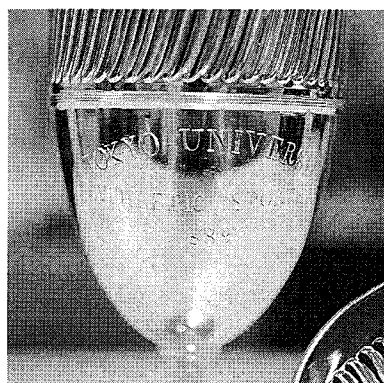


東京大学史料室ニュース

第21号 1998・11・30

目次

大学院特別研究制度について (2).....	2
森有礼と帝大生との関係 (1).....	4
受贈図書一覧.....	6
史料室日誌抄録.....	8



銀製カップ
1889年 (明治22)

大学院特別研究制度について (2)

油井原 均

前号では各大学沿革史にあらわれた大学院特別研究生制度（以下、特研究生制度と略）についての記述を中心として報告をした。今回は、当時の新聞によりながら、制度制定までの経緯を時系列にそって概観してみたい。また、最後に関連史料のデータ化の進行状況についても若干触れたいと思う。

ここで新聞記事を利用するのは、当時のごく一般的なメディアに着目することで、この制度が社会的に注目を集めた様子を追体験してみたいと考えたからである。また、制度の全体像を知るにあたっては公的文書を参照することが不可欠だが、制度制定に至るまでの流れの一端をつかむことは、この作業でも可能だろう。

特研究生制度について言及している記事として、1943（昭和18）年1月16日付朝日新聞記事をまず見てみよう。同年4月に実施される学制改革に関する記事中に「大学院制度」という見出しが掲げられて、文部省が大学院制度改革の準備を鋭意進めているとしたあと、次のような5つの改革点をあげている。「一、大学院は国運の進展に伴い国家目的に即応する学術指導者を養成することを目的とする。二、大学院は帝国大学および所要の官立大学に設置する。三、大学院の在学年限は第一期は二年、第二期は学科により二年または三年とする。四、定員は各大学を通じ第一期約五百人、第二期約二百五十人とする。五、入学資格は実務者を含む大学卒業者およびこれと同等の学力を有する者につき文部省において銓衡の上選抜するものとする」。同日の紙面には「学制改革の要点」という欄も設けられており、その記事中には「大学院の性格」として、「たとえ小学校さえ出していなくても実力のある人材ならば大手をふって銓衡を受けて大学院に入れる」「院生に対しては十分な年金および研究費を与え生活の安定を保障する」という記述もみられる。

このように報道された省令案に対する私立大学からの異議が、いくつかの新聞に報道されている。たとえば、文部省の改革案への六点の異議を記した意見書を、早稲田大学総長が数日前に各方面に送付したとの記事（読売新聞同年1月30日付）がそれにあたる。その記事によれば、私立大学側からみた案の最大の問題点は、「大学院は七帝大及び所要の官大に設置すること」との文言にあり、この文言から私立大学には特研究生制度に基づく大学院が設置されないと考えられたのであった。

私立大学側からの異議に対する文部省側の応答はどのようなものだっただろうか。「大学院新制度が担うもの”官私に差別はない”」（朝日新聞同年2月4日付）という記事は当時の文部省専門教育長の談話を掲載したもののだが、一方で「官学と私学に差別を設けようという気持ちは毛頭ない」と述べつつ、他方では「少なくとも十八年度予算には（私立大学研究科への予算は）組んでいない」と述べており、矛盾を含んだ内容となっている。

その翌日、「私立大学の大学院を語る 早慶の抱負」（朝日新聞2月5日付）と題した記事は、早稲田大学総長と慶應義塾大学総長の談話を掲載している。記事中で両大学総長は、官私を差別しないという前日の専門教育局長談話を評価しつつも、「問題は大学院学生に対する徴兵猶予の特典」（田中穂積早稲田大学総長）「大学院出身者の特典資格が官私によって何ら差別のないことを一層明確にしてほしい」（小泉信三慶應義塾大学総長）と語っている。また、「大学院論を携えて 早慶両総長会議へ 教え子達、母校に一肌」（毎日新聞2月6日付）という記事では、2月5日午後に両大学総長が衆議院議長室を訪問し、両校出身の代議士に、文部省の企画する新しい大学院制度について意見を述べたと報道されている。

そして、この問題は衆議院での質疑へと至る。「東條さん大学院問題に明答 私大にも適用する”出来るだけ” 本年中に実行せん」（朝日新聞2月9日付）という記事によると、衆議院予算総会における安藤正純議員の質問に対して、東條英機首相は、特研究生制度を私立大学にも適用すると明言した。しかし同時に予算などとの兼ね合いがあり、「出来るだけ」同年十月の新学年度から実現したいとも答弁したのであった。

以上の報道からすると、当時はこの問題はかなりの注目を集めたと考えられる。2月9日の朝日新聞記事中では「さしもの大学院問題も一応けりをつけた」と表現されている。

これ以後は、「大学院いよいよ具体化 近く総長協議会を開催」（朝日新聞5月14日付）、「大学院の具体策決まる きのうち当局と大学側懇談」（朝日新聞同年6月3日付）という、のちに正式に指定される十二大学の総長・学長（代理を含む）と文部省側関係官僚が出席してもたれた会議についての報道がみられる。しかし、以後9月30日までは、関連した報道は一般紙ではみられなくなる。そして、「大学院に特別研究生学究を国家で責任養成」との見出しで、10月新学年度

からの特別研究生制度の実施が伝えられることになる（9月30日付朝日新聞）その記事中には「私大は早慶に実施」「戦力増強に主眼」との見出しも含まれている。また、大学総長や選出された特研生へのインタビューも載せられており、かなり大きな扱いがなされている。

以上は一般紙での報道を概観したものである。では、大学や学生など制度の当事者に近いメディアではどのような報道がされていたのだろうか。それを示す一例として、当時の帝国大学新聞の記事をみてみよう。

1943年1月18日付帝国大学新聞をみると、「学制改革案成 七勅令決定 四月新学期生から実施」と大見出しをつけた記事中に、「新大学院は二期制 厳選主義で一般開放」との見出しがある。先に引用した一般紙と同様、記事中では学制改革の一環として扱われている。それ以後の特研生関連記事は、「十月期して新大学院 国費、自費の両制併置」（同年2月8日付）、「疑問・理科系の偏重 収容人員も過少 迂遠を免れぬ新大学院」（2月15日付）、「新大学院再検の声 学水準維持に難」（3月8日付）等、連続して大きく扱われている。記事内容は一般紙より詳細で、批判を多分に含んでいる。制度についての議論の変遷をうかがわせる記事も見いだすことができる。たとえば、「大学制度刷新に急 断案9月半ばか 来週総長会議で検討」との見出しで、「大学院制度改善を中心とする大学制度の根本的改革について（七帝大総長会議で）活発な議論が展開されるものとみられ…」という報道がある（4月12日付）が、その後「大学制度刷新に慎重 全面改正は明年か 新制大学院のみ本年開く」（5月24日付）とされており、特研生制度実施と同時に大学制度の全面改革を行うという議論が、その後前者のみを新学年度より実施するという方向へと変化していったことを示唆する内容となっている。その他、私立大学への制度適用に関連して、「本年度は私大設置が実施されない模様」（9月6日付）という記事もみられる。

特研生制度関連史料の整理・データ化について、最後に触れておきたい。関連史料データ化は、以下のような二種類のデータ作成にわけて進行している。

一つは各年度特研生候補者名簿と採用者名簿に基づいた候補者・選定者のデータ化である。1943年から1945年までの特別研究生の選定は、指定された各大学からの推薦をもとにして、最終的に大学院特別研究生銓衡委員会を経て決定されていた。この銓衡委員会用に作成されたと思われる各大学学部別候補者名簿が残

されているが、まず東京帝国大学の各学部によって作成された候補者名簿について、履歴（軍歴）／出身大学・学部／研究事項などのデータ化を進めている。また、実際に特別研究生に採用された学生については『大学院（第1期）特別研究生名簿』が残されており、これについても前者と同様な形式でデータ化を進めている。現在、1945年までに指定された第一期生候補者までの入力が完成している（敗戦後指定された45年度文科系学部出身者も含む）。また、特研生制度は本来第一期・第二期の計5年を視野に入れており、遺された史料からは、二期生の選定が1945年6月までには行なわれていたと考えられる。今後、選定された二期生についてもデータ化を進める予定である。なお、敗戦後1946年3月より特別研究生の選定は各大学の総長・学長の権限のもとに行なわれることになった（『東京大学百年史』通史二 p.661）。それ以後、候補者名簿は作成されなかったようで、残された史料中には見当たらない。

もう一つのデータ作成は、各年度の『大学院特別研究生関係』綴に収められている文書についてのものである。前述の名簿関係とは別冊に分けて残されているこれらの綴には、文部省との往復文書や学内関係文書をはじめとして、関連したさまざまな文書が綴じられている。たとえば、先に引用した新聞記事でも言及されていた、特研生制度の特徴の一つである徴兵猶予についての協議・連絡に関わる文書も含まれている。これらの文書について、起案日付／原義番号／法令名・件名／発・官庁／内容概略などの項目を立て、現在1945年度までの文書についてデータ化を進めている。



「帝国大学新聞（1943年2月15日付）」

（東京大学史史料室教務補佐員）

森有礼と帝大生との関係 (1)

中野 実

森有礼と帝大生。取り上げた対象は改めて述べるまでもないかもしれない。森は初代文部大臣となり、日本近代教育史上において学校種別の単行法令を公布して一総称して諸学校令——一つの期を画した。いわゆる「国家主義的教育」の創始者と位置づけられている。特に帝国大学の成立にあたっては、初代総理大臣伊藤博文とともに決定的、主導的役割を果たし、帝国大学と直接的に、密接且つ太い関係を有していた、と言われている。しかし彼が1889（明治22）年2月の帝国憲法発布式の当日に暗殺されたことにより、帝大との関係は未完のまま消滅してしまう。

帝国大学学生（帝大生）はどうだろうか。ここでは森が文部大臣在任期間中に卒業、在学した帝大生を対象にする。彼らは1877年以降に東京大学予備門に入学していた。落第などを考慮しなければ、78年に予備門に入学した生徒が帝大最初の卒業生として、1886年7月10日に挙行された卒業証書授与式に臨んだ。彼らは創設直後から帝大誕生までのほぼ全期間を、東京大学の学生生徒として過ごした。言葉を代えていえば、彼らは明治10年代に隆盛した自由民権運動期を東京大学生として経過した、ということである。帝大卒業生の増加は、運動を知らない世代が多数を占めていく過程でもあった。理念、体制、ネットワークを一新した帝大の理想を体现、実現するのは学生たちである。彼ら、特に初期の帝大生たちは、自分たちの過ごした東京大学を刷新した森をどのように感じていたのだろうか。帝国大学をどのように捉えていたのだろうか。

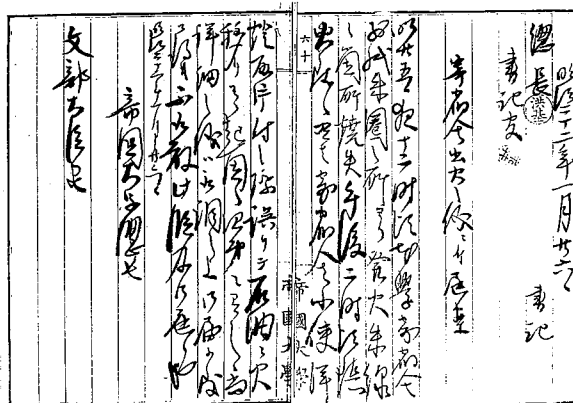
森の演説と暗殺

演説を重要なコミュニケーションの手段と考えたとされる森は、1889年2月7日帝国大学工学大学において、教職員、学生生徒を集めて演説を行った。このときの演説記録（記事）の一つを読むと、末尾に大臣発言の「本文意」をわざわざ解説していた。まず彼の演説内容を同記事から紹介しよう。

彼は維新以後の学問と国家との関係から説き起こし、西洋化の反動は「大学ニ於テモ外国ノ原書ヲ参考書トシテ用フルハ宜シイガ教科書トシテハ宜シクアルマイ」とまでになった。これは1884（明治17）年2月に内達された「其学〔東京大学〕教授用語ノ儀、自今主トシテ邦語ヲ用ヒ、英語ヲ用フルヲ止メ、且参考ノ為独逸書等ヲ講読セシムルノ道相立ヘク」云々のことと思われる（『東京大学百年史』通史1、484頁）。このような状況は改善されてきたが、大学の現状は「文

部大臣ニ於テハ政府ノ思フ所ノ満足ノ点ニハ成テハ居ラスト思フ」と感想を述べ、不満、不備の具体的な指摘は控えるといいながら、前月の火災による学生焼死の件を取り上げた。焼死という痛ましい事態を生んだ火災事件について、森は死者への哀悼の意を捧げることもなしに「斯様ナ場合ニ処スル為ノ大学ノ職員ハ勿論学生ニ於テハ平素如何ナル注意ヲ取ラレシカ各自ノ良心ニ問ハレテ可ナラン、多少遺憾トスル所アルベシ」と批判した。こののち、彼は大学設置の目的に言及して、「国家ノ為メデアル」、「大学ノ職員及ヒ学生タル者ハ国家ト云フ事ガ大学ノ本尊デアルト心得ネバナラヌ、国家ハ大学ノ本尊デアル」と述べ、「大学ノ職員及ヒ大学生ハ貴重ノ者ナレバ文部省ニ於テハ最モ鄭重ニ之ヲ待チ、中々斯クセヨ然カセヨ抔ト小児ニ向テ云フ様ノ事ハ為サズ」云々と発言して、終わった。

図1 寄宿舎火災届



「六〇 寄宿舎火災ニ付文部大臣へ届其他ノ件」『文部省往復』（明治22年）

この4日後に、森は西野文太郎により暗殺される。西野は帝大生たちの間の不穏な動きを耳にしたので忠告にきたとって面会を求めた、という。ベルツは暗殺された2月11日の日記の条に「氏はかねてより憎まれていた。特に数日前、大学の学生団と甚だ激烈なる紛議を醸した。これに関しては、氏に固より責任がある。不可解にも、氏は最初の出火と一学生の死を学生の責任に帰し、之を譴責したからである。世人の感情硬化せる時には、如何なる珍事が発生しても仕方がないのであつた。この空気を犯人は利用したのである。」と。さらに2月16日の条には「西野は秘書官の許に至り、学生団が炬火行列の際、文相に対して遂行せんとする計画に関し情報をもたらせる事を告げた。」（渡辺

正彦訳「ベルツ先生日記抄（四）、『学士会月報』539号）。さらに医学界の長老入沢達吉、森文相時に参事官にあった木場貞長のそれぞれの回顧録には、さきの演説の途中に野次が飛ぶ、起こったという表現がなされていた。（「明治十年以後の東大医学部回顧談」の補遺）『中外医事新報』1179号、1932年「森有礼先生を偲びて」『森有礼全集』第2巻、1972年）。

演説の末尾に記された「本意」とは、この寄宿舎失火事件にかかわる焼死学生への森の発言を補足することにあつたのである。彼の発言は、火災などの場合の「紀律ノ整斎」が必要であり、それが足りないために学生が焼死したことに對して「痛悼余遂ニ此数句ヲ發」した、と解説した。月報編集者にとってわざわざ「本意」を注記しなければならないほどに、学生生徒は憤慨していた、ということが確かに伝わってくる。

ところで、ベルツの日記には「炬火行列」の計画という新しい事柄が指摘されている。宿舎失火事件、森の演説、野次、たいまつ行列など、多くの事柄が出てきた。森暗殺の遠因、近因はこれだけだろうか。次に経過の全体像を描いてみよう。

経過の概要

最初に同じ演説のもう一つの記録を紹介しよう。

「森文部大臣の演説／森文部大臣ハ去る七日午後より工科大学中庭ニ大学総長以下職員学生一同及び高等中学校諸教員を招集して一場の演説をせられたり、当日ハ予て世論の喧しき（殊ニ大学生一同の不满を懐ける）授業料増額の理由を説明せらるべしと触れたりければ、生徒一同ハ云ふ迄も無し教官職員打ち揃ふて我も我もと中庭ニ集て、定めの時刻（二時）ニハ早や全員不残参集し今や遅しと控へたり、聽て森文部大臣ハ稍三十分余も過ぎて辻、浜尾等の諸氏を従へ臨校あり、暫くして大臣ニハ大学廊下ニ起て徐々と演説を始めらる、先ず冒頭ニハ我国維新前教育の状況を述べ、其昔ハ藩主と云ふ者あり〔中略〕次で大学の事ニ説き入つて大学ハ近時余程の進歩ハしたけれども大臣の眼ニテハ不十分の廉々多し、其ハ今一々述ぶるの要無し説かる学生中より請ふ之を聴かんとの声四方ニ起る、大臣ハ左らは申さん……大学ハ先日学生一名を焼殺したるニ非ずや、職員学生の之れニ對する挙動ハ果して諸君の良心ニ耻ずる所なきや……と申さる〔^{「アア」}耻ずる所無し無しとの声彼処此処ニ起り、大臣ハ尚二三言大声ニ申されたけれどもノーノーの声ニテ詳ニ聴くを得ざりしハ残念なりき、以上の演説手初なり、此よりハ兼て待設

けつる授業料増加の明解を与へ、文部省の方針を示さるゝならんと片唾を飲だるニ、如何なる故か大臣ハ話題を他ニ転じ、大学生ハ他日社会の上流を占むる者なれば大学の教授上ニ関してハ猥ニ文部大臣之れニ干渉せず云々と述て茲ニ演説を止められぬ、学生諸氏ハ此ノ有様ニ眉ヲ皺め学生の焼死ニ付き我々の良心を問ハるゝだニ心得ぬニ、今將ニ本論ニ入らんとするニ当り突然弁を止められたる事の不思議さよとて、一同腕を拱きて其判断ニ窮したりとかや」（『東京日々新聞』1889（明治22）年2月9日付）

これは帝大生が投稿したと思われる演説記事である。どうしてこのようなことが言えるかといえば、当時の理科大学大学院学生長岡半太郎が58年後に書いた「炬火行列」（『文芸春秋』、1947年8月号）に森の演説模様を新聞投稿したという記述があり、それに基づいて探し、発見できたからである。演説の概要はさきに記した構成とほぼ同様であるが、演説の目的が異なっている。『学士会月報』の記事は、特定の事項は明示していない。文部大臣の意見、大臣の希望する所、といった抽象的表現にすぎない。これに対して新聞記事は明快である。「授業料増額の理由」を説明する、ということであつたらしい。それはこの年1月17日に出された文部省の計画、すなわち15年間かけて官立学校授業料を約3.3倍（帝国大学の場合は百円）に引き上げる計画を指していた（続）。

図2 寄宿舎火災現場（斜線部分、同前）



受贈図書一覧（平成10年1月～平成10年6月）

修復研究所報告 VOL. 13		学校沿革史誌目録（1986～1991）	
高澤学園創形美術学校	平成9年12月	野間教育研究所	平成4年3月
陸軍船舶戦争—船舶は、今も昔も島国日本の命綱—		武蔵学園史年報	
松原茂生・遠藤昭	平成8年5月	武蔵大学・武蔵高	平成9年12月
神奈川大学評論 第28号		龍谷大学350年史 通史編下	
神奈川大学評論編集専門委員会	平成9年11月	龍谷大学350年史刊行委員会	平成10年3月
京都大学百年史 部局史編1・2・3		三田評論 '98.3	
京都大学百年史編集委員会	平成9年9月	慶應義塾	平成10年3月
いわき明星大学十年の歩み		学問のすすめ 文明論之概略 福扇自傳	総文節索引
いわき明星大学創立十周年記念事業委員会	平成9年10月	慶應義塾大学福澤研究センター	平成10年3月
仏研ブックレット アップ・トゥー・デート NO. 3		大阪府行政資料・刊行物目録	
大乘淑徳学園附置長谷川仏教文化研究所	平成10年1月	大阪府公文書館	平成10年3月
立教学院百二十五年史 資料編 第1巻		申奏録（七）明治14年～明治15年	
立教学院百二十五年史編纂委員会	平成8年5月	北海道立文書館	平成10年1月
新島襄と徳富蘇峰—蘇峰永眠40年記念—		研究紀要 第13号	
同志社大学人文科学研究所周知社史資料室	平成9年11月	北海道立文書館	平成10年3月
サティア<あるがまま> 第29号		立命館百年史紀要 第六号	
東洋大学井上円了記念学術センター	平成10年1月	立命館百年史編纂室	平成10年3月
京都大学百年史写真集		中央大学百年史編集ニュース	
京都大学百年史編集委員会	平成9年9月	中央大学百年史編集委員会専門委員会	平成10年3月
慶應義塾消費組合史		中央大学史紀要 第9号	
慶應義塾大学経済学部白井研究会	平成2年10月	中央大学百年史編集委員会専門委員会	平成10年3月
会員名簿 平成9年創立75周年 第31号		中央大学史資料集 第16集	
青陵会	平成9年10月	中央大学百年史編集委員会専門委員会	平成10年3月
戦争末期における反体制思想学習の記録		百年誌龍門	
米田俊彦	平成9年12月	鹿児島県立加治木高等学校百年史編集企画委員会	平成9年11月
富士論叢 第42巻第2号			
富士短期大学学術研究会	平成9年11月	学術月報 第51巻第2号	
成瀬記念館1997 NO. 13		日本学術振興会	平成10年2月
日本女子大学成瀬記念館	平成9年12月	COMMUNICATION VOL. 13 NO. 72	
桃山学院年史紀要 第17号		日本電信電話株式会社広報部	平成8年4月
桃山学院年史委員会	平成10年2月	北海道立文書館所蔵資料目録13 開拓使文書（4）	
史料目録21 元町清水家・間宮家文書目録		北海道立文書館	平成10年3月
沼津市明治史料館	平成10年3月	北海道立文書館所蔵公文書件名目録13 札幌県治類典（2）	
史料目録22 三津金指家木負相磯家文書目録		北海道立文書館	平成9年12月
沼津市明治史料館	平成10年3月	向陵（1998. 4）	
「鹿鳴館の建築家ジョサイア・コンドル展」図録		一高同窓会	平成10年4月
鈴木博之他	平成9年12月	学士会会報 第818号	
加藤雪子夏季休業日誌		社団法人学士会	平成10年1月
加藤雪子	平成9年11月	新島研究 第89号	
東京電機大学九十年史		同志社大学人文科学研究所周知社史資料室	
（学）東京電機大学90年史編纂委員会	平成10年3月		平成10年2月
戦後教育史研究		阪神・淡路大震災と大阪市立大学の対応	
明星大学戦後教育史研究センター	平成10年2月	大阪市立大学	平成10年3月

受贈図書一覧（平成10年1月～平成10年6月）

同志社談叢 第18号 同志社大学人文科学研究所 同志社社史資料室 平成10年3月	フォントネージと日本の近代美術－志士の美術家たち 東京都庭園美術館 平成9年10月
名古屋大学史紀要 第6号 名古屋大学史資料室 平成10年3月	資料目録 第1集 立命館大学国際平和ミュージアム 平成10年3月
学会会報 第819号 社団法人学士会 平成10年4月	常設展示詳細解説 立命館大学国際平和ミュージアム 平成10年3月
知られざる芸能史 娘義太夫 中央公論社 平成10年4月	戦時下日本の報道写真 立命館大学国際平和ミュージアム 平成10年3月
開館記念 小杉放菴展 小杉放菴記念日光美術館 平成9年10月	「憲法・平和・未来」 立命館大学国際平和ミュージアム 平成10年3月
小杉放菴記念日光美術館所蔵作品目録 小杉放菴記念日光美術館 平成9年10月	放射能発見100年・核実験 立命館大学国際平和ミュージアム 平成10年3月
風景と自然、国立公園の絵画展 小杉放菴記念日光美術館 平成10年4月	文化学術立国をめざして 国立大学協会 平成7年11月
一宮市博物館年報（5） 一宮市博物館 平成10年3月	日本学術振興会事業の概要 平成8. 9年度 日本学術振興会 平成8. 9年
神奈川大学史資料集 第十四集 神奈川大学大学資料編纂室 平成10年3月	STUDENT LIFE '89 株式会社レダック 平成元年3月
一宮市博物館開館10周年記念特別展 画家佐分眞の軌跡 一宮市博物館 平成9年10月	千葉県文書館 第3号 千葉県文書館 平成10年3月
関西学院百年史 通史編Ⅱ 関西学院百年史編纂事業委員会 平成10年3月	関西大学年史紀要 第10号 関西大学年史編纂委員会 平成10年3月
大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所年報 第22号 大乘淑徳学園附置長谷川仏教文化研究所 平成10年3月	司馬遼太郎の風景3 NHK「街道をゆく」プロジェクト 平成10年4月
桔梗－三宅秀とその周辺－ 福田雅代 昭和60年6月	流通経済大学三十年史 流通経済大学 平成10年3月
本のぬまず人物誌－館蔵コレクションの紹介－ 沼津市明治史料館 平成10年3月	北九州大学五十年史 北九州大学 平成10年3月
沼津市博物館紀要22 沼津市明治史料館 平成10年3月	日本の弁護士 潮見俊隆 昭和47年11月
翔べ！フェニックス広島大学統合移転完了記念誌1995 広島大学五十年史編集室 平成7年11月	東京女子大学の80年 学校法人東京女子大学 平成10年4月
学術月報 第51巻第4号 日本学術振興会 平成10年4月	学術月報 第51巻第5号 日本学術振興会 平成10年5月
三田評論 '98.5 慶應義塾 平成10年5月	宮城学院 最近10年小史 宮城学院最近10年小史編集委員会 平成10年3月
法政大学と戦後50年 資料篇一 法政大学戦後50年史編纂委員会 平成10年3月	近代日本研究 第14巻（1997年） 慶應義塾福澤研究センター 平成10年3月
関西学院百年史 通史編Ⅰ 関西学院百年史編纂事業委員会 平成9年5月	三田評論 '98.6 慶應義塾 平成10年6月
九州大学大学史料叢書 第6輯 九州大学大学史料室 平成10年3月	東京音楽大学最近10年の歩み 年譜90年略史 学校法人東京音楽大学校史編纂室 平成10年3月
総長訓示式辞（自明治四十四年四月至昭和二十八年八月） 九州大学大学史料室 平成10年3月	アメリカの農学高等教育の改革 広島大学教育研究センター 平成10年3月

史料室日誌抄録（平成10年3月～平成10年10月）

- | | |
|--|--|
| <p>3. 31 火 東京大学史紀要第16号及び史料室ニュース第20号発行。</p> <p>4. 1 水 大杉俊男室員、総務課総務掛へ異動。事務補佐員、末本千佳採用。</p> <p>4. 14 火 史料室で雨漏り発生。（その後、4/15, 5/19, 5/25, 8/28, 8/31, 9/16にも発生。）中野室員、新任職員研修講義。</p> <p>4. 16 木 教育学部より資料受入。</p> <p>4. 25 土 NHK「街道をゆく一本郷界限」放映。（史料室所蔵資料が使用される）</p> <p>5. 12 火 中野室員、技術系新任職員研修講義。</p> <p>5. 13 水 広島大学50年史編集室、編纂事業参考のため来室。</p> <p>5. 19 火 広報室より資料受入。</p> <p>5. 26 火 岐阜県加茂郡白川中学校生徒、修学旅行の進路取材学習の一環で史料室見学、東大に関して質問、及びビデオ撮影。</p> <p>6. 8 月 青木教子氏史料返却のため栃木へ出張。</p> <p>6. 25 木 早稲田大学大学史資料センターへ、特研生史料の調査。</p> <p>6. 29 月 慶應義塾大学福澤研究センターへ、特研生史料の調査。</p> <p>8. 2 日 中野室員、旧制高等学校記念館に出張。</p> <p>8. 7 金 文学部の事務倉庫を訪問。</p> <p>8. 14 金 内田貞夫氏来室し、資料寄贈。</p> | <p>8. 18 火 学徒出陣関係で岡沢裕氏から聞き取り。</p> <p>8. 19 水 文京ふるさと資料館来室、史料について説明。120周年の時の資料を広報室より受入。</p> <p>8. 26 水 実践女子学園、資料のデータベース化等について調査のため、史料室見学。</p> <p>9. 19 土 第1回平賀文書研究会開催。</p> <p>9. 22 火 第46回史料の保存委員会開催。</p> <p>9. 30 水 中野室員、全国大学史史料協議会総会及び研究部会に出席。（於：愛媛大学）</p> |
| | この間の閲覧者数 |
| | 学内者 11名 |
| | 学外者 31名 |
| | 主な学外閲覧者所属機関 |
| | 名古屋大学、東京芸術大学、くもん出版、早稲田大学、(株)アマゾン、日経ジオグラフィック社、金沢大学、文京ふるさと歴史館、北海道大学、実践女子大学、お茶の水女子大学、(株)日立ビルシステム、日本大学生物資源科学部資料館、千代田ソフトプランニング、奈良女子大学、筑波大学 |
| | 文献撮影・複写許可件数 15件 |
| | 調査（照会）件数 50件 |

表紙の説明

銀製カップについて

この銀製カップ（高さ22cm、直径9cm）は、篠沢恭助氏（昭和35年法卒）を介して桃井聡安氏（桃井産業株式会社社長）より平成10年7月東京大学へ寄贈された。この種の寄贈ははじめてのものであり、東京大学史史料室に保管されることになった。

このカップは、桃井氏の祖父にあたる故人枝国安太郎氏（明治22年11月30日、東京帝国大学医科大学医学科卒業）が在学中スポーツマンとして大学主催の水上運動会でのボートレースや陸上運動会の各種レースなどで活躍されたなかで、明治22年10月26日御殿下グラウンドで開催した陸上運動会の440ヤードレースで優勝し、Kirkwood William氏（イギリス人・司法省法律顧問）から贈られたものである。

なお、当時東京大学における主要なスポーツ大会において、種目ごとの入賞者に、大学や財界および外国公使館の協力者からこの種の銀製カップが贈られていた。

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第21号

発行日：1998年11月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話（3812）2111内線2036

印刷所：株式会社 芳文社

Archives Section of the University of Tokyo

東京都新宿区新宿3-12-4